

「仏説の意味」というテーマについて次の二つの問いを問うものと理解し、これらの点について特に『大乘莊嚴經論』第 1 章に論述される大乘仏説論に拠りつつ考えてみたい。すなわち一つには、仏典に見られる仏説(あるいは同義語としての仏語、如來說)という語が指し示す意味内容は何か、つまり何が仏説であるかという問いであり、二つには、そうした仏説はわれわれ有情にとってどんな意味・意義を持っているといえるのか、という問いである。

一

本論書の大乗仏説論は大乗が仏説である八種の理由を列挙する第 1 章第 7 偈に始まるが、同偈に対するスティラマティ(安慧)の註釈は、そうした大乘仏説の八種の理由が対論者(有部に所属して大乘を容認しない出家者たちと想定されよう)から提起された八種からなる大乘非仏説の非難に対する答弁として提示されたものであることを明らかにする。同註釈に紹介される対論者の非難からは、彼らの仏説観、つまり何が仏説であるのかについての理解を看取することができるが、注意されるのは、そうした対論者の仏説観が決して一義に収まらないことである。いまかりにこれを大別すると、次の二類に分けることができよう。

ア) 仏という教説者が説いたものを仏説とする仏説観。

イ) 教説の内容を基準とした仏説観。

仏説とは何かという問いに対して、それはシャーキャムニ仏が説いた教説であるという答えほど明快なものはない。しかし対論者の八種の非難は、そうした仏説観を前提としたものばかりでなく、例えば煩惱を対治する教説が仏説であるといったイ)に分類される仏説観を前提としたものがある。

イ)に分類される仏説観は、実際の有部アビダルマに確認されるばかりでなく、原始経典にその淵源を見出すことができる。逆にいえば、イ)の仏説観が原始経典において用意されていることが、部派のアビダルマや大乘経典なる仏説が発展する一つの根拠となっているものと考えられる。本論書もまた、第 1 章第 8 偈以下第 13 偈までにおいて、仏説観ア)にも配慮しつつ、しかし仏説観イ)の観点により重心を置いて大乘仏説の立論を試みているものと考えられる。

二

本論書の同章第 19-20 偈には、大乘非仏説を唱える者に対して仏説に対する聞・思の必要性を説く大乘擁護論が見られる。未聞の経典についてはこれを拒否することなくまず聞くべきであり、さらに聞いた教説については如理に思索すべきであるというのである。本論書のこの論述は『迦葉品』～『菩薩地』～『解深密経』にわたる一連の言説を踏まえたものと考えられるが、われわれはこうした大乘仏説論の文脈における聞・思の強調を単なる大乘擁護の弁明ととらえるべきではないだろう。教法(仏説)に対する聞・思の重要性は、なによりも原始経典以来、通仏教的に説かれるものである。経典に説かれた教法を<仏より与えられたことば>として聞くことなしに凡夫は生死の迷妄から超出することはできない。しかしまた聞かれた教法について(いまこの私によって)正しく思索されるべきことが強調される場所に、仏説をいかに受け取るべきかについての仏教の伝統的態度の一面があらわれているものと考えられる。

キーワード: 『大乘莊嚴經論』、仏説の多義性、与えられたことばとしての仏説